
 学 会 記 事

第69回新潟消化器病研究会

日 時 平成11年2月13日(土)
午後1時00分より
会 場 新潟ユニゾンプラザ
4階 大研修室

一 般 演 題

1) 成人男性に発症したサイトメガロウイルス
肝炎の一例

森 茂紀・渡辺 史郎(信楽園病院)
柳沢 善計・村山 久夫(内科)
野本 実 (新潟大学第三内科)
樋口 庄市 (樋口内科消化器科)
医院

症例は、33才の男性。38度台の高熱を主訴とし当科外来受診。5月7日、入院。黄疸、皮疹、咽頭痛、関節痛、リンパ節腫脹無し。検査では、胆道系酵素優位の軽度の肝機能異常を認めた。末梢血中に異型リンパ球の出現も認めた。腹部 CT、腹部 US 検査では、脾腫大のみ。HBs 抗原、IgM HA 抗体、HCV 抗体、HCV RNA、抗核抗体、抗ミトコンドリア抗体は陰性。EBV は既感染のパターン。CMV IgM Ab が陽性、Antigenemia も陽性であり、CMV 初感染による急性肝炎と診断した。組織的には軽度の急性肝炎の所見のみで核内封入体は認めなかった。発熱は、約2週間持続したが、特殊な治療をせず、自然に解熱し退院となった。

2) E 型肝炎の2例

五十嵐正人・武井 伸一
古川 浩一・市田 隆文(新潟大学)
青柳 豊・朝倉 均(第三内科)
伊東 義一 (同
保健管理センター)

E 型肝炎は、国内では稀な疾患であるが、近年の国際化により、今後本疾患を診療する機会が増加する可能性があると考えられる。

当科で経験した E 型肝炎の2例を提示し、若干の文

献的考察を加えて報告する。

症例1は20歳男性(学生)。症例2は30歳男性(Bangladesh 人留学生)である。ともに消化器症状を主訴に当科入院。A 型肝炎様の経過を示し、3週間程度で肝炎は軽快、退院した。血清学的検査では A 型、B 型、C 型肝炎ウイルスを始め、各種ウイルスマーカーも陰性であったが、E 型肝炎ウイルス(以下 HEV)に対する IgM 型、IgG 型の抗体が証明され、E 型肝炎の診断が確定した。

本疾患は、一般に予後は良好であるが、最近の報告では、胎盤や胎児に与える影響が大きく、局所の凝固異常による胎盤梗塞や胎児の肝炎の問題が報告されている。今後治療法の確立が望まれるところである。

3) coiling が奏功した肝動脈門脈瘻による門脈
圧亢進症の1例

後藤 俊夫・関根 厚雄(県立吉田病院)
八木 一芳(内科)

肝動脈門脈瘻(APF)は無症状で門脈圧亢進症をきたす疾患であるが、腹水、胃静脈瘤破裂を合併した APF に対し、コイルによる塞栓術が奏功した1例を報告する。症例は81才女性。大腸癌、門脈圧亢進症の診断にて、当院外科入院中、平成10年10月10日吐血をきたし、上部消化管内視鏡にて、胃静脈瘤破裂と診断され、同年10月14日当科に転科した。腹部造影 CT にて APF と診断した。腹腔動脈造影では左肝動脈門脈瘻がみられ、左肝動脈遠位部より連続的に近位部までマイクロコイルにて塞栓した。塞栓後造影では肝動脈門脈瘻はほぼ閉鎖された。塞栓後、静脈瘤は改善、腹水は消失した。

APF は塞栓後、側副路形成、再開通をきたすことが報告されており、経過観察が必要である。

4) 田上町腹部エコー検診(7年間の成果と現
況について)

吉田 英春・遠藤 雅裕(県立加茂病院)
中山 義秀(内科)
吉川 京子(同看護婦)
岡田かおる・長谷川智子
奥山 晴美・小林美奈子(田上町保健福
社課 保健婦)
大野 玲子
田下美代子(同看護婦)

田上町では1992年より地域胃癌検診時に腹部エコー検査による肝胆膵腎の検診を併用してきた。今回7年間